

報



會

會 岳 山 本 日

42

月 一 年 十 和 昭

倫敦だより

石 川 欣 一

夕刊新聞イーヴニング・ニュースの漫画を送ります。この新聞は、数週間にわたって倫敦の有名なクラブや建物に關する漫画を連載してゐますが、十三日付のが同封のアルバイン・クラブで、文句は翻譯するまでもなく「先週、卑怯未練なやからが階段を利用したさうだ」とあります。

山に登る時間もなくなつてゐるのに日本山岳會の會員といふので、晩餐會によばれました。これは日本山岳會代表といふことになつて行つたのだから、報告の義務があるやうに思ふ。

第一が十二月八日コンノート・ルームズの Fell and Rock Climbing club ロンドン支部の第十五回ダイナア、メイン・テーブルに A.C. のスペンサー氏、Lady A.C. の會長アレン夫人などと一緒に座らせられました。僕の席はリチャーズ夫人と牛津の詩人で日本に來たことのある Edmund Blunden の新夫人との間でした。いろ／＼御馳走があり、演説がありおしまひにみんな得手をつないでオールド・ロング・サインを歌つた。このダイナアで特に

日本山岳會のために乾杯がありました。

一寸面白いと思つたのは、きつちり九時に會長ハッドフィールド博士が「今、九時である、毎年の例に従つて一分間起立し、今晚こゝに來られぬ會員のために沈黙の乾杯をしよう」といつたことです。

LONDON LAUGHS . . . By LEE
THE ALPINE CLUB.

"I hear some cad used the stairs last week."
(Evening News, 13/Dec. 1934 より)

十一日にはホテル・ヴィクトリアで A.C. のダイナアがありました。これは白ネクタイに勳章といふのでとにかく軍人が多いと見えて大變な勳章。男ばかりです。僕はメイン・テーブルの大部下座の方にウェストンさんと並んですはりました。ノルウェー、スイス、オーストリア各國の公使をはじめ、どうもお歴々が多

く、トースト・リストも多かつたが一番はじめの The King で、みんなが杯をあげて The King といつたすぐ後で、ウェストンさんが God bless him! とつたのは、それがウェストンさんの口から出ただけであつて、とてもいい氣持がしました。

僕の左隣は最近日本から歸つて來たゴウステン氏。上高地の帝國ホテルなんぞ知つてゐるんです。百瀬慎太郎氏の噂も出ました。

會長サー・ジョン・ウィザースが三年の任期を終へて、ストラット大佐と變るので、兩氏の健康を祝し、演説もありました。來賓を代表したのがマクミラン卿で、故都スコットランドの話をした中に、面白かつたのは、かういふ話。
倫敦から來た人がスコットランドで山に登つた。あまり高い山でもないのに一緒に رفتつたスコットランド

人が自慢するので「なる程ね、高い山だ。天氣がよければ倫敦なんぞ見えるだらうね」といふと

「天氣がよければ、もつと遠く迄見える」との返事

「ちやあそこが見える?」

「お月様が見える」

翌日が L.A.C. の例によつてグレート・セントラル・ホテル。お客に

主 要 目 次

●倫敦だより 石川 欣一

●プロツケン怪 浦松佐美太郎

●第六十五回小集會豫告

●會員通信

立山天狗平の小屋に就て

東澤と黒岳 白頭山麓より

●會務報告

昭和九年度會員大會 新舊理事送迎會 其他

よばれてかういつては悪いが、いつも乍らに情ないホテルです。A.C. は一際女をよばぬが、L.A.C. は男を招待する。これも燕尾服でしたが、A.C. ほどしやちこばらず、F & R みたいに歌なんぞ唱はず。丁度いゝ加減な處でした。キングレッド・クラブへのトーストでは、日本山岳會のミスター・石川の名を特にメンションされ、會衆一同ヤンヤとはく手したことです。右で報告終り。

プロツケンの怪

浦松佐美太郎

最近山の出版物が非常に殖えると共に、イカモノの數も随分多い様に思はれる。殊に山の本の翻譯に於てイカモノ横行が激しい様だ。やれマナーだの、やれ何だのと云はれながら、何れ程に理解されてゐるのか思へば心細い限りである。

恐らく、眞面目な批判の缺けてゐることが、此のイカモノ横行の因をなしてゐるのであらう。そんな意味で、之から折を見て、此の會報誌上を借りて、最も甚しいイカモノを、少し批判して見度いと思ふ。こんな努力によつても、山の出版物の水準が、高められることとなり、もつと正直に、良心的になるとすれば、お互の爲めに、何よりの幸だと思はれる。

藤木九三氏の翻譯「峰・峠・氷河」といふ本を、あつちこつち拾ひ讀みして、先づ氣の付いたことは、こいつはひどいイカモノだといふことであつた。その中でも最もひどいのは同書第二十五頁以下に載せられてあるウインスロップ・ヤングの「頂上にて」といふ一文である。次に藤木氏の譯文と、筆者の拙譯とを並べて置く。この譯で見ても、ヤングが少しも解つてゐないのは明だ。それにも拘らず、ヤングがどうのこうのは

恐れ入らざるを得ない。

それよりもひどいのは、此の譯文の前書きとして、次の一節はヤングの「オン・ハイ・ヒルス」の第七章の末尾から抜いたたんで嘘を書いてゐることである。ほんとうに「オン・ハイ・ヒルス」を讀んだのなら、こんなことはよもや云はれる筈でない。右の譯文は、ランの編著「イングリッシュ・ユメニ・イン・ジ・アルプス」から抜いたものである事は明かだ。之はヤングが當時、英國の一雜誌に寄稿したものからの抜粋であつて、後に「オン・ハイ・ヒルス」の第七章に之を入れた時には、ヤングは右の一文を殆ど書き改める迄に、琢磨の苦心を拂つてゐる。若し右の二書をお待ちの方は、兩者を比較されて山の文章を如何に書くべきかの参考とされるとよいと思ふ。藤木氏の前書きは、ヤングの折角の苦心を水の泡にしてしまつた様なものだ。

頂に立つ (藤木氏譯文)

時は既に正午を過ぎてゐた。一行は「壁」の登攀に約七時間を費し、そして露營地から通算して十二時間にわたり、殆ど息もつかずに攀りつ

づけたのだつた。今、頂に立つ身は精根と氣力のかぎりを傾け盡し、まるで腦天から酒をぶつかけられたやうだつた。そして躰は極度に疲れ、前途に打ち勝たねばならぬ何物かが残されてゐたとしても、最早や立ち上る勇氣もなかつた。しかし乍ら、頂上における反撥作用は著しいものがあつた。あらゆる想念は、缺くるなき生理的慾求に應じて、憩ひの素晴らしい感覺に展開した。過ぎし努力の想念、および前途に横はる豫想も、ただ疲勞そのものだつたにしては——すべては幸福と、純眞な自己實現の波の起伏の間に融け込んでしまつた。神經も、筋肉も想念も、すべて憩ひを求めて協調融和し、しかもあらゆる感覺は並外れて多感的となり、美の客觀的印象の登場に一致共力する。この種の感受性こそは、頂上から展望する山々の景觀に特殊な生彩と榮光とをもたらす、しかし現實の合間々々には、ある種の慾望が頭を擡げるのは餘儀ない次第だ。そして人間的な物慾は、寒氣肌を刺す頂上においてすら、時の莫大な浪費を顧みずして心地よき眠りを求める。またあるものは當然とはいへ、極めて無味乾燥な食物を食らんとして眼醒める。更にあるものはまざまざと凝視し、あるひは眠りを催さしめ、感覺的と外觀的とを問はず、あらゆる愉樂は順序も定めず次から次へと押し寄せ、そして後にはただ失はれた時の喜ばしい存在が、かどや

かしい雲の如く記憶に甦る。

コルテツは、ぐつすり、寢込んでしまつた。彼の顔色には、瞭かに、最後の登攀の劇しい勢作による疲勞困憊が現はれてゐた。ヨセフと私は岩の凹んだ片隅に身を屈め、そして食事を攝りながら、過ぎし日同じビークの上に立つた時の追憶を小聲で語り合つた。しかしお互ひの口数は、心中の想ひに較べて極めて少かつた。

そして私自身としては、その時未だ眠りについての物憂げな、また受動的な傾向は、さまで接迫してゐなかつた。決意と疑ひと怖れと、望みと更に張り切つた努力と、劇しい喜び……それらの生涯を支配するあらゆる感覺は、全力を傾けた收獲高の附隨物として、僅か半日の間に經驗し盡したのだつた。かくして人は絶頂に達し、今や勝利の瞬間において裁かれるのだ。誰か能く、新しい想念に妨げられる事なく、最後の刹那において、單なる感覺の虹の橋をより、長くする以上のことを期し得ようぞ？

参 考 譯

十二時過ぎであつた。「山面」の登攀に、約七時間を費してしまつた。露營地を發つた時からすれば、少しも休んでゐないのに、十二時間もかゝつてゐる。高みへ出てからは、山の空氣と、非常な緊張とが、心に、酒の様な刺激を與へてゐた。そして

我々の前に戦ふべきものゝ残つてゐた間は、疲勞などといふことは、あり得べからざるものでさへあつた。併し、頂上に立つた時、その反動は非常に大きなものであつた。あらゆる思ひは、たつた一の休息といふ贅澤な感情の中に消え去つてしまつた身體は、溢れるばかりの喜びの中に浸つてゐた。過ぎ去つた苦闘の思ひ、頂上から、麓へ下る勞苦に對する考慮、更に疲勞それ自身さへもが、凡てが、肉體的の満足の中に、純粹無雜の自覺の中に、消え去つてしまつてゐた。神經と、筋肉と、思考の、凡てが調和し、共に意に安らいでゐた。従つて、凡ゆる感覺は、外觀の美に對し、異常に感じ易くなつてゐた。此の鋭い感受性こそが、山頂の眺望の輝かしさに、特殊の價値を與へてゐるのである。併し、此の自覺から醒めた時には、何かしなければならぬ。そこで或る者は、激しい寒さにも拘らず、樂しさうに眠てしまふ之は、素晴らしい時を、無駄にしてしまふものである。或る者は、食べることを好む。之は適切なことではあるが卑俗だ。又或る者は、たゞ目を開いたまゝ、ぼかんとしてゐる。そして素晴らしい感激と眺望を心にしつつかと捉へることなくやり過してしまふ。そして後に顧みたま、此の愉しい一時の間の經驗は、ただぼうつと輝しい雲の如くにしか記憶されてゐないのである。

コルテツは、ぐつすりと寢込んで

しまつた。彼は、此の登攀の最後の数時間の激しい苦闘に、疲れ果て、しまつたらしい。ジョーセフと私は、岩壁に攀ち下つて、食事の眞似事をした。そして此の山に就ての過去の日の思ひ出を、ぼそぼそと語り合つた。併し、此の會話は、我々の心に思ふ所とは、何の係りもないものであつた。だから、私に、氣だるい柔らかなさを與へてゐた眠たさは此の會話によつて、殆ど妨げられもしなかつた。決斷・疑惑・恐怖・希望・緊張・感激・凡ゆる一生涯の感情を、此の半日の間に、肉體上の全力を盡しての活動に伴つて、經驗し盡してしまつた。之等の凡ゆる經驗は、山頂に立つた勝利の瞬間に、その最高調に達し、そして立派に價値あるものとされたのであつた。此の虹の様に、果敢なく消え去つてゆく感激を、その續き得る限り、その最後の瞬間まで、他の思ひに煩はさるゝことなく、引き止めて置き度いと希ふ以外に、何の望みがあと得ようか。

立山天狗平の小屋に就て

杉山 良平

去る廿一日天狗平小屋に着き翌一日は雪にとちこめられ、二日快晴を得て雄山に登頂三日に下山しました以下天狗平の小屋について一寸お知らせします。

小屋は縣電で建築しこれが管理を千垣驛前運送店杉田寛治氏に依託した態となつてゐる、それでこの小屋を杉田の小屋ともいつてゐる。

位置は天狗平の北新道と舊道の中程の所に建つてゐて、間口八間奥行三間半南面した二階建(南面と云つても西へ三十度許りフレてゐる)建家から八尺許り離れて、西側には十二尺南側には七尺の防風石垣が築かれ雪の少ない今年でもすつかり、外

第六十五回小集會豫告

時 日 二月十四日(木曜)

午後六時半

場 所 赤坂溜池三會堂

講 演

ゲオルク・ジンメル

山岳觀を中心として

會員 辻 莊 一氏

右の如く開催致しますから

萬障御繰合せ御來會下さい

つて、室堂にある様な陰鬱さから完全に解放された大した防寒の裝備もせずに、これからは氣輕るに立山に登れる様になつた譯だ。風あたりの強い位置に建てられた、この小屋が冬の試練に對してどれ位堪へられるかは二冬か三冬たねば解らぬ譯だが、去る九月の様な風はめつたに吹かないのだから、先づ大丈夫なのではなからうか。

杉田の主人は正月は十日過ぎまで又三、四月の頃には小屋に登つて登山客の便宜をはかるさうだ。

今年は御多分にもれず雪が少くて弘法五尺、追分八尺、天狗平十二尺室堂は庇まで埋つてゐた。ブナ的小屋にも大抵小屋番がシーズンだけは登つてゐるらしい。(二月五日)

東澤と黒岳

小池 文雄

十二月廿五日より一月六日まで、左記日程により登山旅行しました。

案内は佐伯勇藏、豐治の二名。

十二月廿六日曇 蘆峰—弘法小屋

廿七日晴雪 弘法小屋—室堂

廿八日晴後曇 室堂—平小屋

廿九日雪 滞在

卅日晴 平—東澤間偵察

卅一日曇雪 平—東澤間偵察

一月一日雪 平小屋—東澤—ノ股釣

小屋

二日雪晴 東澤谷釣小屋—東澤谷踏

三日晴曇 東澤谷釣小屋—東澤瀨行
—水晶小屋
四日吹雪 水晶小屋滞在
五日晴 黒岳往復、午後一時發—鳥帽子小屋

六日晴 鳥帽子小屋—大町下山

今年は積雪量少く、立山材木坂は熊野權現までは徒歩にて押し通り、ビジウ平ノ桑谷は切れ込み深く苦痛でした。

彌陀陀原に出れば流石に積雪はスキーに充分にて、一ノ越東面の雄山澤も埋り方少く、板屋峠の上りは積雪量少きためとブツシュのため快適とは云ひ難く、東澤—平間は三ヶ所の徒渉と四箇所の架橋とにより辛うじて通過し、卅一日の夜は雨にてへつりの箇所の水解け、折角架けたる橋流失の危機の念ありしも幸ひ河は増水せず同行三名各自一度宛河中に轉落泥鼠となりしも負傷なく東澤小屋に到着。

東澤谷も積雪少きため左岸より右岸へと幾度かスキーを脱いで渡り黒岳直下の二、二〇〇米程度の谷奥に到り始めて川は積雪にて埋まり居りそれが爲め意外に時間を要し、東澤小屋朝七時發、午後五時水晶小屋に到着。

水晶小屋の滞在當時は食糧缺乏し各自一日粥二合宛と定め之れにより三日を食ひ延し、五日は午前十一時より出て黒岳を往復し、強風を衝いて午後一時水晶小屋を發足午後五時二十分鳥帽子小屋に到着。

鳥帽子よりの下りはスキーを使ふ所は上の方少許、大部分輪カンにて漕ぎ下りました。
葛温泉にて漸く里の美味なる晝飯にありつけました。

白頭山麓より

北川 正三

多年宿望の白頭山麓地帯の踏査を終り凍雪零下二十八度の教化域外に假宿中、勃海國の舊都地域を踏査、鏡泊湖畔を一巡して明春歸國の豫定であります。

多人の蒐集と、珍奇の獸類、化石岩石等を十ヶ年計畫にて探査の豫定です、吉林の名にそむかず、美しき林が白雪より立つ景色まことに絶觀と稱することが出来ます。
(大同二年十二月九日)

陸地測量部新刊地圖

二萬五千分ノ一地形圖新版	山形近傍	天童温泉	一面
同	山形南部		一面
五萬分ノ一	松本近傍		
同	明科	一面	
同	豐科	一面	
同	有明	一面	
同	古見	一面	
二萬五千分ノ一地形圖鐵道補入	札幌近傍	小樽東部	一面
五萬分ノ一地形圖修正	開閉岳	開閉岳	一面



會務報告

昭和九年度會員大會

十二月十三日午後七時より昭和九年度會員大會を開催す。

高頭會長より先づ一場の挨拶あり次いで松方氏は一般會務報告、山岳、山日記、山小屋其他主なる事業報告の後、登山界全般に渉る昭和九年中の簡明なるレビューを行ひ、山山氏の會計報告あつて。閉會、續いて講演會に移る。

出席者

- 箕川 一、山崎 武士、福田嘉四郎、宮田 恒雄、伊藤直三郎、岡本 勝二、山口 清秀、川上 謙、中司 文夫、松方 三郎、島山 梯成、岩崎京二郎、飛川 維之、角田 吉夫、宇田川 久太郎、大澤 照貞、木村 一男、長島 春雄、木暮理太郎、加藤 恭平、長澤 佳熊、岡田 喜一、伊藤秀五郎、中原繁之助、木村 鐵吉、荒井道太郎、三木 高峯、津田 周二、飯塚篤之助、高橋 健治、兒島 勘次、茨木猪之吉、吉田 禮二、田口 一郎、小林太刀夫、本郷 常幸、神谷 恭、吉田 竹志、橋本晋七郎

- 西川 信義、淺原 重繼、村尾 至二、黒田 正夫、齊藤 雄三、増山清太郎、野口 末延、鍋倉 英夫、園村 孝、長沼 重谷、重雄、近藤 恒雄、逸見 眞雄、小林 丘、岡田友治郎、足立源一郎、安田登茂次、湯淺 巖、廣瀬 潔、田邊 主計、渡邊 漸、中原繁之助、高頭仁兵衛、小島 久太、森田 勝彦、黒田 孝雄、

講演會

十二月十三日 午後七時 於三會堂 白頭山登攀 兒島勘次氏 前記會員大會に引續き木暮氏の紹介にて、今夏ひと夏を朝鮮の山旅に過ぎた會員兒島勘次氏の白頭山其他面白い登山談があつた。更に美麗なる多數の幻燈によつて見なれぬ山の姿は吾々の前に次々と轉過せられ興味深い一夜を過した。

新舊理事送迎會

一月十日數寄屋橋々畔、B・R・ストラントにて新舊理事送迎會を開催、松方理事役員會を代表して送別歡迎の辭を述べられ一同歡をつくして九時散會、出席役員左の如し。

- 楢 有恒、松方 三郎、木村 鐵吉、島山 梯成、藤島 敏男、額田 敏、飯塚篤之助、逸見 眞雄、田中 菅雄、森田 勝彦、田口 一郎、磯野 計藏、茨木猪之吉、櫻井 信雄、神谷 恭、出席者 高頭、島山、松方、田口、額田、黒田、櫻井、逸見、

一月定期理事會報告

- 出席者 高頭、島山、松方、田口、額田、黒田、櫻井、逸見、

- 委任 磯野、三田、飯塚、一、入會者詮衡の件 一、昭和九年度事務分擔左の通り決定せり 會計 島山、飯塚、庶務 島山、黒田、磯野、編輯 松方、逸見、森田、福島、山日記 田口、黒田、藤島、角田、

(囑託)

- 會報 額田、櫻井、逸見、圖書 三田、松方、磯野、調査 田口、三田、松方、一、山岳二十九年第三號は一月末發行の豫定山岳三十年一號原稿締切は本月末日

退會者

- 昭和九年十二月 中 (一二三四) 東京市 角田喜久雄 (一六八) 同 杉山 正重 (三一五) 同 大木 操

- (二八五) 静岡縣 杉本 良 (一一〇四) 大阪市 田賀直次郎

會員計報

長岡市 渡邊清次郎氏(明治三十九年五月入會 會員章番號七五) 昭和八年十二月二十五日逝去せられたる旨昨年十二月二十三日通知を接手す。本會は茲に謹而哀悼の意を表す。

新舊圖書購入圖書

- 上達の早い最新のスキー術 以上 高橋健治氏 耶馬溪の風景と植物 以上 竹内 亮氏 川口孫治郎著 飛驒の白川村 以上 住廣 造氏 頂 中村邦之助氏遺稿 以上 本郷常幸氏

新着圖書

- 登山とスキー 十二月號 黎明社 山 同 梓書房 野島 同 明文堂 山小屋 同 同 凱ルン 同 同 寫眞月報 同 小西六本店 地學雜誌 同 東京地學協會 ツーリスト 同 同 ジャパン、ツーリスト、ビュロー、ベルグ 同 岡山山岳會 獨立樹 同 東京山岳俱樂部 旅 同 東京アルカウ會 樹氷 同 山人俱樂部 黒木立 同 關東岳愛會 旅路 同 關東旅行俱樂部 つくし 同 筑紫山岳會

- 山 同 横濱山岳會 旅行 同 東京山岳會 旅行 同 東京旅行俱樂部 せふり 同 福岡山の會 岳 同 日本銀行山岳會 管見錄 十一月號 大阪管見社 しらかんば 同 都島工業山岳會 かぐれい會報 十一月號 京都山岳會報 同 京都山岳會報 十二月號 東京山岳會報 同 東京市山岳部報 同 日本登高會報 同 明峰山岳會報 同 アツタスキークラブ部報 同 武藏野を探る會報 同 廣島山岳會報 同 臺灣山岳會報 同 獎健ワンダーフォーゲル 同 奈良山岳會報 同 九州山岳聯盟報告 同 山人會月報 二六 登山趣味會報 一六 法商山岳部報 第三號

編者曰、洋書之部は都合により次號で發表します

昭和十年一月十八日印刷 昭和十年一月三十日發行

- 發行所 日本山岳會 電話二六四九番 廣店一手取扱 進 恒 四社 第四六五番 刷印所 刷印木多